

『風に紅葉』の道行文をめぐつて

岸 本 いく 恵

中世物語の一つである『風に紅葉』は、宮内庁書陵部に室町期の一写本が蔵されているだけであり、活字本も『桂宮本叢書』に見られるのみである。

主人公大将の妹である宣耀殿女御は春宮の女御であり、二度目の懐妊をするが、祈禱の甲斐もなく、夏頃から日増しに衰弱する。そこで大将自ら使者に立ち、唐帰りの高德の僧を招聘するため、難波に向かうことになるが、その途中に見える道行文について考察したい。

一般に道行文とは、旅の経過の地名列挙のあること、進行性の表現であること、韻文であることの共通の要素がある。また、掛詞と古歌引用という修辞がある場合も多い。(1)

ちなみに、室町時代の道行文の最高傑作といわれる『太平記』巻第二「俊基朝臣再関東下向事」(2)は、「落下ノ雪ニ踏迷フ、片野ノ春ノ桜ガリ、紅葉ノ錦ヲ衣テ帰」で始まり、「憂ヲバ留ヌ相坂ノ、関ノ清水ニ袖濡テ、末ハ山路ヲ打出ノ浜、沖ヲ遙見渡セバ、塩ナラヌ海ニコガレ行、身ヲ浮舟ノ浮沈ミ(後略)」のように、俊基が関東へ送られるまでの旅の経過を地名・歌枕を多数入れ、掛詞・縁語等を駆使し、リズムミカルに進行と旅情を表現している。

『風に紅葉』の場合は如何であろうか。以下に原文を記す。(3)

御めのとの民部卿、その子とも、さらてもむつまじき殿上人二三人にて、八月廿日あまりのありあけの月と、も

に、御ふねにめす、とはたのをも、よとのわたり、なからのはしのふるきあと、いまつ、はしかもと、ほとなくすきて、わたのへや、大えのきしにつきぬれは、くもるに見ゆるいこまやまなど、ならはすめつらしうおほす、いまたあかき程に、なにはのてらにまいりつき給えり。とう行ちうしんの思ひなしといひ、心のちりをす、くらんかめ井の水をむすひあけても、物ことに御心すみつ、かのひしりたつねさせ給へは、すみよしに侍よし申せは、つきの日そ、御むまにてわたり給、す、きかるかやなど、あきの草とも、宮こよりはほのかにあはれけにて、みちすから心ほそし、あへの、わうしなといふわたりすきてまいりつき給へは、あけのたまかき神さひて、さこそはけんてうなるらめと、まことにしんもをこりぬへし、

この簡単な道行文には、「とはたのをも」「よとのわたり」「なからのはしのふるきあと」「いまつ」「はしかもと」「わたのへ」「大え」「いこまやま」「なにはのてら」「かめ井の水」「すみよし」「あへの、わうし」の地名があげられる。これらの中には歌枕だけでなく、単なる地名もあるが、以下に各地名の検討を試みよう。

「とはたのをも」は「鳥羽田の面」。「鳥羽田」は、鳥羽にある田の意で、鳥羽は、現在、京都市伏見区。古代の紀伊郡鳥羽郷の地で、平安京の南に接し、桂川と鴨川の合流点に近い低湿な平野。歌枕で、『八雲御抄』などに記されている。『五畿内志』『山城志』⁽⁴⁾には、

やましろのとはたのおもをみわたせばほのかにけさぞ秋風はふく（「題不知」好忠・『詞花集』八二二）
の歌が見える⁽⁵⁾。他に鳥羽田の面を詠んだ歌に、

おほえ山かたぶく月の影さえてとはたの面におつるかりがね（五十首歌たてまつりし時、月前聞雁といふことを）慈円・『新古今集』五〇三

露しげき鳥羽田のおもの秋かぜにたまゆらやどるよひのいな妻（建仁元年百首御歌の中に）後鳥羽院・『風雅

集』五八七)

などがある。

「よとのわたり」は「淀の渡」。「淀川兩岸一覽」⁽⁶⁾には、「淀大渡」として、

いにしへは木津川御牧の西より北に流れ、宇治川に合せし大河なり。これを舟わたしにせしゆゑ、大渡りといへり。しかるを豊大閤の御時、木津川を南へ通じ、大橋・間小橋等を架けさせたまふとぞ。

と記されている。また、『山州名跡志』^(増京都叢書本)には、

淀ノ渡リ 詠^ヌ和歌^ニ

時鳥雲のはつかに聞ゆ也淀の渡のむらさめのそら 後鳥羽院

此頃は淀のわたりのあやめ草すゑこす浪にかる人もなし 順徳院

清少納言枕雙紙^ニ

卯月の晦日に。長谷寺にまうずとて。淀の渡りといふものをせしかば。舟に車をかきすへて行に。しやうぶこもなど。すゑみぢかく見えしを。とらせたれば。いとながかりける。こもつみたる舟のある岸^{キシ}こそいみじうをかしかりしか。たかせの淀には是を^{ヨド}読^{ヨミ}けるなめりとみえし

とある。「淀の渡」を詠んだ歌としては、次のようなものもある。

いづ方になきてゆくくらむ郭公よどのわたりのまだよぶかきに ^{(天曆御時御屏風に、よどのわたりする人かける}

所に」忠見・『拾遺集』一一三)

風のおとはとばたの面にさきだちぬよどのわたりに秋やきぬらむ ^(慈円・『拾玉集』一七五七)

「なかからはしのふるきあと」は「長柄橋旧跡」。淀川下流域の新淀川と淀川(大川)の分岐点、明治二九年の淀

川改修以前の天津川と淀川の分岐点辺りを称したと考えられる。

『撰津名所図会』(一)によれば、

この橋の旧跡、古来よりさだかならず。いづれの世に架け初めて、いづれの世に朽壊れけん。これまた分明ならず。橋杭と称する朽木所々にあり。(中略) 上古は大物浦より東北江口里、南は福島・浦江・曾禰崎より北は神崎川まで一面の大江なり。すなはち大江の名もこれより出づる。またこれを難波江・難波入江・難波江の浦・三津江・御津浦とも和歌に詠まれたり。(中略) 古来よりも今の北長柄より豊島郡垂水庄に至るまでを長柄の橋跡といふ(後略)

とある。文献上では、『日本後紀』(増補国史大系本) 卷廿二、嵯峨天皇の弘仁三年(八二二) 六月に、「己丑。遣使造撰津国長柄橋。」と見えるのが一番古く、『文徳実録』(増補国史大系本) 卷五、文徳天皇の仁寿三年(八五三) 十月に、「長柄三国両河。頃年橋梁断絶。人馬不通。」とその損壊が記されている。歌枕としても知られ、

いにしへにあらざるがらはし柱ふりにし跡をしのばずもなし(名所百首歌めされける時、長柄橋) 順徳院・

『玉葉集』二〇七四

さもあらばあれ名のみながらの橋柱くちずはいまの人もしのばじ(「おなじ心をよみ侍りける」定家・『玉葉集』二〇七五)

なにはなるながらのはしもつくるなり今はわが身をなにとへむ(伊勢・『古今集』一〇五一)

などがある。『古今集』仮名序に「今はふじの山も煙たたずなりながらのはしもつくるなりとさく人はうたにのみぞ心をなぐさめける」という、新規架橋を伝聞した表現もある。『袋草紙』には、能因法師が長柄橋架橋の際の鉋屑をもっていたことが伝えられ、『家長日記』『明月記』には後鳥羽院の御物に水底に朽ち残る橋柱から造った和歌所の文

台が用いられていた記事が見え、珍重されてきたことがわかる。(8) また、『枕草子』(日本古典文学大系本)に「橋は、あさむづの橋。長柄の橋」とあげられている。

「いまつ」「はしかもと」は、「今津」「柱本」と考えられる。『桂宮本叢書』の翻刻によれば「はしかもと」とあるが、写本を調査すると、「か」は明らかに「ら」の誤読であることが理解される。「柱本」は、現在も高槻市柱本の地名がある。『淀川兩岸一覽』(9)によれば、

三島江村の下にあり、いにしへ御牧のありし時、中の御牧といひし旧趾なり。上の御牧は前にいふ上牧村なり。共に『延喜式』に出づ。淀川の流れこの辺りにて土砂多く滞るにや、所々に瀬をなすゆゑ、通船のさしつかへざるために、常に河堀りの人夫出でてこれを浚へ水尾串を立てて水路の便をよくす。(後略)

とある。『大阪府の地名』(平凡社)には、『台記』久安四年(一一四八)三月二二日条に「宿「柱本辺」今夜密召「江口遊女於舟中」と見え、淀川河津の一つであること、『山槐記』治承四年(一一八〇)七月一八日条に「未剋於古河乗船、於今津日入、乗燭之後、留船於柱本差饌、月出々船」とあることから、柱本付近は今津とも呼ばれたことは明らかである。柱本が港湾集落であったことは院政期以後明らかで、『古今著聞集』にも今津の地名が見える。

「わたのへ」は「渡辺」。現在、大阪市東区石町八軒屋のあたりをいう。『大日本地名辞書』によれば、

又渡部に作る、難波江の渡口の地を云ふ、三代実録云、仁寿三年、撰津国奏言、長柄三河、頃年橋断絶、人馬不通、請准堀江川、置二雙船、以通済渡、許之。古事記伝云、堀江は渡辺と云ふ処なり、此江に傍て南渡辺北渡辺とて里有り、堀江の渡の辺なる故に渡辺と云しなり、橋のありし時もあり渡辺橋と云りき、其橋は今の天神橋のあたりとぞ。

とあり、難波江の堀江の一部であろうと思われる。「渡辺の津」の名で、平安時代にはわが国最大の港となり、淀川

の水駅として京・大坂の交通路、並びに四天王寺・住吉・高野山などに参詣する要所となり、特に熊野詣が盛んになってからは旅人が多く、熊野王子の一番目渡辺王子（窪津王子）が置かれ、熊野詣の経由地として重視された。

また、「渡辺」の起源について、『難波古道の研究』⁽¹⁰⁾に、

渡辺とは大江渡の辺はとりなるより起つた。（中略）古来わたのへと書くところから、海の辺の転化であるとして、往昔の難波津の古地を此処に擬し、ひいてはこの地の古代性を云謂する一説もあるが、難波津の古地の不明であつた時代のことなら兎も角、わたのへは矢張わたりのへの訛と解すべきであらう。

という説もある。

「大えのきし」は「大江岸」。古代から中世にかけての渡辺津の一部で、近世には大川南岸の天満橋と天神橋の間の浜、八軒家付近と考えられていた。『摂津名所図会』⁽¹¹⁾には、

古歌の心を按ずるに天満橋南爪、今の八軒家の浜なり。これより南の方一堆の丘山にして、西北は大江なり。大坂旧図を見るに大江橋・渡辺橋は一橋二名なり。八軒屋といふは旅舎八家つらなりて、京師の上下夜となく昼となく入船出船ありて喧し。かまひす（後略）

と記される。歌枕としても知られる。

わたのべやおほえのきしにやどりしてくもぬにみゆるいこま山かな（「つのくににくだりてはべりけるに旅宿遠望心をよみ侍ける」良暹・『後拾遺集』五二三）

『風に紅葉』のこのあたりの描写は、この歌を引歌にしている。なお、三条西実隆の『高野参詣日記』（新群書類従本）には、

渡辺より、能勢源五郎輿馬など迎へにおこせて、こゝより船にのり移りて漕ぎ出づるほど、能因法師が雲居に見

ゆる伊駒山も思ひいでられ侍り。(中略) ながらのわたりすぎぬる程、心地わびしくて尋ねもみず。

のように、『風に紅葉』と同じ地名が見え、『後拾遺集』の歌も引歌にしている。

「いこまやま」は、奈良県の北西部を南北に走り、大阪府との境界線をなす生駒山地の主峰である「生駒山」。畿内のほぼ中央に位置し、東に大和盆地、西に大阪平野・大阪湾をのぞみ、はるか京都や神戸まで眺望できるので、古来、航海の目印ともなったようである。『日本書紀』『万葉集』にも数々あり、胆駒山・生馬山・射駒山・伊駒山とも書かれている。『伊勢物語』『太平記』などにもしばしば見られ、歌枕でもある。

ひさかたのくもるに見えしいこま山はるはかすみのふもとなりけり(「百首歌よみ侍りけるに」良経・『新勅撰集』一二七八)

などの歌が詠まれている。

「なにはのてら」は、『難波の寺』で四天王寺のこと。現在、JR天王寺駅の真北約七〇〇メートル、茶臼山の北東にある和宗総本山。『五畿内志』の「摂津志」¹²⁾には、「天王寺村山号「荒陵」一名三津寺又名難波大寺」とある。荒陵山四天王寺敬田院と号し、本尊は救世観音。『摂津名所図会』¹³⁾によれば、

東生郡にあり。宗旨八宗兼学、今時天台宗江府東叡山日光御門跡に属す。一名難波寺、また難波大寺、また御津寺法花園、また堀江寺、また荒陵寺ともいふ

とあり、『続日本後記』承和四年(八三七)二月丁酉(八日)条「脩于奉_レ納_二天王寺聖靈御髪_一」にみえるように、略して天王寺ともいう。飛鳥時代に聖德太子の発願により、外交・軍事上の要衝で上町台地のほぼ中央に位置し、難波津にも近い地に創建された。古代には北に難波宮(跡地は現在東区)があり、南大門から熊野街道が南に走り、西門付近には熊野神社が祀られていた。

四天王寺を詠んだ歌としては、

さよふけてあしの末こす浦かぜにあはれうちそふ浪の音かな（天王寺にまゐりけるに、なにはのうらにとまりてよみ侍りける」肥後・『新古今集』九一九）

たきぎつき煙もすみてさりにけんこれやなごりとみるぞかなしき（天王寺にまゐりて、舍利ををがみたてまつりてよみ侍りける」瞻西・『千載集』一二〇九）

よをすくふあとはむかしにかはらねどはじめたてけん時をしぞ思ふ（天王寺御幸のとき、古寺忍昔といへるころをよめる」定長・『千載集』一二五三）

など多数見られる。

「かめ井の水」は、この四天王寺境内にある亀井堂の井泉のことと、古来、名水として知られる。『摂津名所図会』には、

桁行六間三尺、梁行三間五寸。靈泉は金堂の中なる青竜池より流れ出づるなり。白き石の間より玉のごとく清泉涌出するより、白石玉出水となづく。また皇太子御姿をうつし楊枝の御影を書かせたまふにより、影向井ともいふ。また石鑪の亀より流れ出づるより亀井ともいふ。あるがいはく、白石玉出水の旧跡は一心寺本堂の西、竹林の中にありとぞ。むかしは境地広くして、この地も廓内にして亀井水の名あるか。『本願縁起』云ふ「地には七宝を敷けり。ゆゑに青竜つねに守護し麗水東に流る。これを号けて白石玉出水と云ふ。慈悲心をもつてこれを飲めば法薬となる」と云々

と記している。白石玉出の水は、地中を西へ抜けて、有栖山新清水寺（現、天王寺区伶人町）の舞台下の切り岸に湧出して、玉手の滝となっている。しかし、滝は京都清水寺の音羽の滝を模したもので、嘉永年間に設けられたらしい。

『天王寺区史』では、玉出ではなく、玉手の水として、一心寺の西崖下の四恩学園玉水分園（現、天王寺区逢阪下之町）のものを指しているが、左記のように『撰津名所図会』では、「一心寺本堂の西竹林の中」としている。

『玉葉』『宇治閑白高野山御参詣記』『平家物語』にも亀井の水の記述がみえる。また、『大江岸』の項であげた『高野参詣日記』の少し前文には、天王寺に詣でて、亀井の水の歌を詠んでいる記述が見られる。歌枕でもあり、よろづよをすめるかめぬのみづはさはとみのをがはのながれなるらん（天王寺にまゐりてかめぬにてよみ侍ける）弁乳母・『後拾遺集』一〇七二）

あさからぬちぎりの程ぞくまれぬるかめ井の水にかげうつしつ（天王寺へまゐりてかめ井の水をみてよみける）西行・『山家集』八六三）

『栄華物語』（日本古典文学大系本）巻第三十一「殿上の花見」には、長元四年（一〇三二）九月の上東門院彰子の四天王寺参詣の記事があり、

廿九日に帰らせ給ついでに、亀井の水のもとに寄せ給て御覧ずる程におほしめしける、

と仰せられたりけんも、げにいとをかしこそ。（下、三三三頁）
濁りなき亀井の水をむすび上げて心の塵をす、ぎつるかな

とあり、『新古今集』には「天王寺のかめ井の水を御覧じて」の詞書とともに、この歌が収められている。『風に紅葉』におけるこの箇所も、右の歌を引歌としている。

「すみよし」は「住吉」。現、大阪市住吉区。住吉の地名については、『撰津国風土記逸文』に、「住吉と称ふ所以は、昔息長足比売の天皇（神功）の世、住吉の大神現れ出で、天下を巡行して、住む可き国を覓ぐ時、沼名棕の長岡の前に到り、乃ち「斯れ実に住むべきの国なり」と謂ひ、遂に讃称して「真住み吉し、住吉の国」と云ひて、仍りて

神社を定む。今の俗、略して直ちに須美乃穀と称す」と地名起源説話が記される。¹⁵⁾

大阪市の南部にあつて、東部は上町台地の丘陵、西部は大和川・木津川河口の低地に至る地域で、仁徳天皇が「墨江之津」を定めてこの地に港を開かれ（『古事記』）、また、海上の守護神住吉神社の勧請鎮座すること知られる。

かつては海に面した松原の続く景勝地として知られ、古来歌枕として多くの歌が残っている。「すみよし」はそのまゝ「住吉社」を意味する場合が多く、松は住吉社の象徴で神木であるため、歌枕では読み合されることが多い。

あまくだるあら人神のあひおひをおもへばひさし住吉の松（すみよしにまうでて）安法・『拾遺集』五八九
うきながらひさしくぞ世をすぎにけるあはれやかけし住吉の松（俊成・『新古今集』一七九三）

すみよしとあまはつぐともながるすな人忘草おふといふなり（あひしれりける人の住吉にまうでけるによりみてつかはしける）忠岑・『古今集』九一七

「あへの、わうし」は「阿倍王子神社」。現、大阪市阿倍野区阿倍野元町。阿倍野街道（熊野街道）に面し、伊弉諾大神・伊弉冉大神・素盞鳴大神を祀る。『神道大辞典』¹⁶⁾によれば、

平安時代の熊野詣と共に発達した熊野九十九王子の第二社で、宇多法皇を始め後鳥羽上皇に至るまで歴代の法皇、上皇は熊野御幸の途次当社を御遙拝または御奉幣あつたと伝ふ。古来王子権現、阿部権現と称せられ、衆庶の参拝多く、

とある。藤原定家の『後鳥羽院熊野御幸記』（新群書類従本）建仁元年（一二〇一）十月六日条に「弘暎。私出馬指し参阿倍野王子」。（先達相伴致三奉幣之儀。参詣住吉社。）（一）と見え、正中三年（一二三六）の熊野縁起には道中王子次第として「安倍野」をあげている。社記によれば、寛弘年間（一〇〇四―一二）の創建。

以上のように、大將は、陰暦八月二十日すぎの夜明け方に乗船。京から淀川を下って、渡辺津より下船して熊野街

道を南下、「なにはのてら」すなわち四天王寺に参詣。境内の「亀井の水」で手を清めて祈願。しかし、訪ねてきた高德の僧が住吉に居るといので、その日はそこで一泊。翌日、馬で、さらに南下して、熊野九十九王子の第二王子「阿倍野王子」（現「阿倍王子神社」）を通過すると、住吉神社の「朱の玉垣」^{あけたまがき}が目に染みるのであった、という行程二日の記述である。

貞治三年（一三六四）の將軍足利義詮の住吉詣を記した『住吉詣』（新群書類従本）に、

卯月上旬のころ、津の国難波の浦みむとて、かの所にまうでけるに、淀より舟にのりて、この河づらかしこの山々をながめ行くに、（中略）夜明けもてゆくほどに、長柄といふ所につきぬ。いにしへは此所に橋ありて、人のゆきかよひしが、今ははしの跡とては、わづかに古くひばかりなり。（中略）朽ち果てし長柄の橋の長らへてけふに逢ひぬる身ぞふりにける、やうく難波の浦につきぬ。（中略）天王寺にたちより見れば、聖徳太子四天王ををさめおき給ふ。（中略）石の鳥居、亀井の水など、心しづかながめて、

よろづ代を亀井の水に結びおきて行末長く我も頼まむ

それより住よしにまかりて、（後略）

とあり、『風に紅葉』の行程に非常によく似ている。

また、『源氏物語』の若紫巻の冒頭に、光源氏が癪病にかかり北山の聖のもとに、加持を受けに訪れる場面があるが、『風に紅葉』の場合と対比すると次表のようになる。（『源氏物語』は日本古典文学大系本を使用。『風に紅葉』は、適宜、かなを漢字に訂正し、もとの仮名を振仮名として残すほか、濁点を施す。）

	源氏物語	方角 北山 <small>きたやま</small>	御供 むつましき <small>よつりいつたり</small> 四五人	出発 暁	季節 三月 <small>やよひ</small> のつごもり	景色 京の花、さかりはみな過 <small>す</small> ぎにけり。 山の桜はまださかりにて入りもておはするまに、 霞 <small>はら</small> のたゝずまひもをかしう見ゆれば	僧の住い 峰 <small>みね</small> 高く、深 <small>ふか</small> き岩 <small>いは</small> の中にぞ、聖 <small>ひじり</small> 入り居 <small>ゐ</small> たりける
	風に紅葉	海 <small>かた</small> の方。天王寺・住吉（南へ）	御乳母 <small>めのと</small> の民部卿、その子供、さらでもむつましき 殿上人二三 <small>にさん</small> 人	有明 <small>ありあけ</small> の月と、もに	八月廿日あまり	すゝき、かるかやなど秋 <small>あき</small> の草ども、京 <small>みやこ</small> よりほのかにあはれげにて	海面 <small>かた</small> に渴 <small>あせ</small> のごとくなる庵 <small>いほけ</small> 、すゝき、かるかやなどをか、事に結びてぞありける

このように、北と南、春と秋、山と海と設定を変えているのは、有名な若紫巻の描写をむしろ積極的に取入れたとも考えられるのではなからうか。

ただし、『風に紅葉』の場合、道行文としては、冒頭にあげた定義から考えると、あまり評価できないのではないだろうか。というのは、歌枕も折りこみ、古歌の引用もしているが、「わたのべや」や「にごりなき」の有名な歌をそのままとっており、掛詞や縁語等も見当らない。また、先に地名の検討で見たように、淀川下りの描写は、本来の道順ならば、『鳥羽田の面』『淀渡』『今津』『柱本』『長柄橋旧跡』『渡辺』『大江岸』であるべきだが、この道行文の記述では、いささか異なっているため、進行性の表現とは言い得ない。おそらく、作者は淀川の地理について、あまり配慮していないのではないかと考えられる。

なお、ジャクリーヌ・ピジョー氏は、『横笛草子』等を例にあげて、御伽草子における道行文について次のようなことを述べておられる。^①「尋ね」のテーマが繋がっていること、読者が昔から文学によって馴染んできた街道とその沿道の地名が圧倒的に多いこと、掛詞や古歌引用も大部分は平安時代からのものであることから、作者は、珍らしい地名で読者の興味を起こしたり、新しい世界に導こうというのではなく、むしろ誰もが知っている名所、古歌を用い、平安時代の雰囲気を感じさせようと努めたらしいと言われるのである。『横笛草子』の場合も、羅生門や北野、大井川、嵯峨、北山のような有名な地名を十一ほど順序出鱈目に並べたりして京都の名所を折りこみ、『千載集』の歌を引用したりしている。

このような御伽草子の道行文の特色を考慮すると、大体、同時代の頃と考えられる『風に紅葉』の場合も、ある程度それと同様のことが言えるのではないかと思われる。

- (1) 道行文の定義については、角田一郎氏『道行文研究序論(一)・(二)』(『広島女子大学紀要』第一・五号 昭和四一年三月・昭和四五年三月)などに詳しい。
- (2) 『日本古典文学大系34』六七頁
- (3) 『桂宮本叢書17』一六二―一六三頁
- (4) 『日本古典全集』所収本 上巻一六九頁
- (5) 歌集は、すべて『新編国歌大観』による。(一)内に詞書、作者、歌集名、大観番号を示す。以下も同様。
- (6) 『日本名所風俗図会11』(角川書店) 一五九頁
- (7) 『日本名所風俗図会10』一一七頁
- (8) 『大日本地名辞書』吉田東伍著(富山房)、『文学遺跡辞典 散文編』竹下数馬編(東京堂出版)などに詳しい。
- (9) 注6 一八七頁
- (10) 竹山真次著 湯川弘文社 昭和十年 三頁
- (11) 注7 一二七頁
- (12) 注4下巻五二三頁
- (13) 注7四八頁
- (14) 注7五五頁
- (15) 『大阪府の地名』(平凡社) 七二六頁
- (16) 宮地直一・佐伯有義両氏監修(平凡社) 三八頁
- (17) 『文学』第四三卷六号 昭和五十年六月

〔付記〕 本稿作成に際して、『風に紅葉』輪読会(紅葉会)のメンバーである鈴木弘道先生、中西健治先生から種々御教示いただきました。厚く御礼申しあげます。

『風に紅葉』の道行文をめぐる